



一貫コース通信

大学受験から学べる事（ここには真の出会いが在る）

3月は卒業式と並行して国公立大学の合格発表の時期とも重なり、メンタル的にも大きく揺れ動く月でもあります。前者は“よくやったね…”の言葉が相応しく、それ以外の話題には極力広げない事が要となります。しかし、後者の場合は本命の合格発表こそが最重要事項なので、正直なところ諸手を挙げて喜ぶ事自体難しいと思っています。卒業を英語でコメント(出発)と呼んで居るのですが、私には船出の様に思えてなりません。何故ならこれからの航海は必ずしも順風満帆とは行かないからです。

話題は替わりますが『前期日程試験』の発表も終わり、現在“福島成蹊一貫”の結果が県内外で話題を集めています。最初にその根拠とも言える国公立大学の合格結果を挙げてみます。

東京大学理科Ⅲ類・Ⅱ類、京都大学理学部理学科、一橋大学ソーシャル・データサイエンス学部、東北大学（医学部保健学科）、福島大学農学群、福島県立医科大学（保健科学部臨床検査・理学療法・看護学部看護）と成ります。次に主な私立大学を列記すると、慶應義塾大学（医学部・理工学部）2名、国際医療福祉大学（医学部2名・看護4名・保健医療6）12名・東北医科薬科大学医学部医学科2名、早稲田大学（創造理工・社会科学・人間科学部）3名、東京理科大学（理・創域理工・経営）計6名、中央大学（理工）3名、青山学院大学（社会情報）2名、法政大学（理工）2名、同支社大学（理工）2名、津田塾大学学芸学部...と成ります。何れも全国区の有名難関大学であり、13名で挑んだ結果であります。

実は、私も立場からか多くの方々から喜びと絶賛の言葉を頂戴しました。当然“東京大学理科Ⅱ類・Ⅲ類”や“京都大学理学部”、そして“慶應義塾医学部医学科”等への評価であり、結果に至った経緯や説明は全く不要でした。同様に、もし仮に私が外部の立場でも同様の反応をしたに違い在りません。では、今般の結果を齎した、大きな要因は果たして何処に在ったのでしょうか。（史実に迫る上で重要なのは、Fact（事実）と Truth（真実）の間を如何に埋められるかですが、私は幸運にも6年間身近に居たので絶好の機会を与えられました。）

私の経験では、生徒の思いを汲み取り導くと言うのは、言葉で言うほど簡単な事では在りません。しかし、それを卓越の教科指導力でやってのけたのが担任石澤先生・副担任藤田先生でした。何よりも核心と思えたのは、生徒・保護者と厚い信頼関係を築き上げた事です。昨今、信頼と言葉で言っても、この関係の構築程難しいものは在りません。実際には常日頃の積み上げでしか創れません。本来ヒトはそう強くは出来て居ませんし、理想・目的を掲げて中々長続きしません。思うに、私が言葉にすれば陳腐になりますが、“地道な、地道な日常の言行一致の積み上げ”でしか成し得ないのではないのでしょうか。私は、生徒と保護者、そして担任団を核(コア)に、教員団が一丸となった事が本年度の結果に繋がったのだと確信して居ます。そう、ここには“志を持った同志の真の出会い”が在ったのです。

